

# 東北紀行

Tohoku Travelogue

第 29 号/2019 年 6 月/編集：丸岡泰（石巻専修大学）

## 観光地の衰退要因とその再生 —「創造都市」を創造する

立教大学名誉教授 溝尾 良隆

### I 観光地の盛衰要因とその再生

#### 1、観光地のライフサイクルと移り変わり。

観光地は、導入期→成長期→成熟期→衰退期の過程をたどると考えられている（R・バトラーの理論）。そして、持続的に成長していくためには成熟期の戦略が重要で、現状の分析と将来の予測をしっかりと行い、次のサイクルの導入期までの新たな施策を準備しておかなければならないとされている。

一方、我が国の観光地の移り変わりを振り返ると、19 世紀半ばまでは優れた自然資源と歴史的資源を有する「まち（京、江戸）」「温泉地」「寺社参詣地」「街道町」などが主流であったが、19 世紀半ばに入ると「見る・登る」目的の「自然風景地」が加わり、1960 年代に「海水浴・スキー」などの「レクリエーション地」、1970 年代には、「都市の発展により都市そのものを楽しむ」「都市観光地」や「古き良き街並みや農村に注目するグリーンツーリズム対象の「農村地域」などが登場してきた。

さらに 1980 年代に入ると TDR、USJ などの「大型テーマパーク型」が続々とオープン。さらに、海外旅行の増大により「外国観光地」が競争に加わるなど、現在では、多様多彩な観光地が乱立する状況となっている。

#### 2、衰退の始まりと要因 衰退例

70 年代前半から温泉地や寺社観光地の衰退への兆候は表れていたが、旅行需要の総数が伸び続けていたため、問題が顕在化すること無く観光地の種類と数・宿泊収容力が増え続けていった。

しかし、80 年代前半あたりから需要総数の伸びが鈍化すると、観光地同士のキャパの奪い合いが始まり、十分な戦略を準備していなかった観光地の衰退がはじまっ

JITR(Japan Institute of Tourism Research)-Tohoku た。特に、昔から日本の主流を担ってきた観光地（温泉地・寺社・街道の宿場町）が厳しい競争に直面した。

#### 1) 団体旅行依存型の大型温泉地

団体旅行者確保のため、画一的な大型旅館を主としていた温泉地は、需要の多様化による客数減少に加え、主要客の団体旅行そのものの減少、新婚旅行の海外化など最も大きな影響を受けたと思われる。中には、ピーク時の 3 割～5 割まで客数が落ち込んだ所も少なくない。

<代表例>熱海・山代・片山津など。

#### 2) 首都近郊観光地

高速交通機関の進展も既存観光地衰退の一因となった。飛行機・新幹線の発達により、これまで大都市から 1 泊圏内にあり立地に恵まれていた地域が、低価格で行ける北海道・沖縄といった、全国の観光地との同時競争という状況に追い込まれた。

<代表例>水上・鬼怒川など。

#### 3) スキー特化型の観光地

若者のスキー離れによりスキーに特化して地域だけでなく、温泉地もスキー重点に切り替えたのが裏目となった。

<代表例>新潟湯沢・大鱈温泉など。

#### 4) ブーム型観光地

マスコミに踊らされ「若者の天国」「東京の原宿を再現」等と持てはやされ急激な開発を進めるも、ブームは短期間にて去りあつという間に衰退した。

<代表例>清里・新島など。

#### 5) 門前町（狭義には鳥居前町）

車社会を迎え、各地で寺社に近接して広大な駐車場を完備していったが、皮肉にも「観光で立ち寄るのみで宿泊は別」という結果となり、宿泊数の減少や門前町を歩く人も減り、門前町の衰退を招いてしまった。

<代表例>（かつての）出雲大社・伊勢など。

#### 6) 政策による衰退

国自治体の農業・工業優先政策により、干拓・埋め立てが行われ、海水浴場・潮干狩り場などが消失した。日本独自の変化に富んだ自然の魅力が失われることにより客数が減少した。

<代表例>八郎潟・瀬戸内海など。

#### 7) 政争・市町村合併による衰退

元来優秀な観光地だった小規模町村が、大きな都市との合併によって、政治的な発言力が弱まり、十分な観光予算の確保が困難となる。

<代表例>群馬県新治村（みなかみ町と合併）、古くは浅間温泉（松本市と合併）など。

## 2、創造都市が出来にくい日本

明治以降、日本は何度も市町村合併を繰り返し国が自治体を扱いやすくする一方、特色のない街が出来上がっていった。国と地方の財政収入は 30 : 70、税収の配分は 65 : 35 である。市町村は、少しでも国からの補助金を引き出す事に懸命で、出来るだけ国の政策に追随しようとする。これでは独自の理念からの都市創造は出来ない。創造都市になるには、まず、どのような街を作るのか、どのような街にしたいのか、方向性をしっかりと定めよう。国からの補助金などを獲得するならばよいだろう。

## 3、成功事例

### 1) 千葉県我孫子市

福嶋浩彦市長は、新施設を造らず、既存施設の再利用・効率化を徹底した。住民主導の街づくりを、市民の活動の下支えと公共全体のコーディネーターに徹することで、多様な住民の主体（NPO300 団体）を育て上げ、財政の健全化と共に豊かな街を作り上げた。

### 2) 千葉県流山市

井崎義治市長は、市行政にマーケティング発想を取り入れ、自ら職員に教え根付かせた。鉄道の駅名が「オオタカの森」であるが、生態系の頂点のオオタカを守るとともに人間にも快適な生活を実現した。少子化対策として、働く夫婦が安心して子育てできるように、駅での子供預かり所、のち希望の保育所に預け、受取時間前に駅に戻す制度を導入した。若い夫婦を中心に転入者が急増し、首都圏内でトップクラスの 63% が流山市を希望して住まいを決めている。

### 3) フランス・ナント市

衰退した工業都市だったナントは、起用され隣町から来た 38 歳の新市長が、緑を増やす、車から LRT（Light Rail Transit=次世代型路面電車システム）への転換を進める、アートを導入するなどした結果、フランスで最も住みやすい街になった。

## 4、創造都市を実現するために

その都市のトップに立つ人間は、自分が思い描いている街の理想像についていつも考えていなければならない。そして、自分の街をいかに魅力あるようにするかについて、勉強を重ね、他の自治体や外部の専門家などからも多くを学ぶべきである。その上で、革新的な行政を行うために、前進する意思、勇気、想像力、決断力を持って自らが先頭に立ち、実現へ向けて不退転の意思を持ってあらゆる手段を講じるべきである。

\*2019年5月19日仙台市講演の要約。

## 3、再生の実例

多くの観光地が衰退していく中、再生を成功させた観光地も存在する。それらの観光地は、しっかりと方向性を持ち、戦略を立てて実行する事で再生に成功した。

### 1) 温泉地の再生：大分県由布院温泉、群馬県草津温泉

歓楽型温泉地ではなく、ゆったりと滞在出来て、豊かな人生を送れるような保養型温泉地である。上記両温泉ともドイツ型の温泉地づくりを指向している。現在では、東の草津、西の由布院と称されるようになった。

### 2) スキー場の再生：北海道ニセコ

全国的には高齢者、家族利用者の開拓が進む中、ニセコや白馬はオーストラリアや韓国などからのスキー客の増加が見られた。ニセコはオーストラリア人が夏場の活用を指導した。

### 3) 門前町の再生：出雲大社神門通り

新たに門前町に駐車場を設置した。新規に 41 店舗が進出した。個々の商店が連携を密にしている。滞在時間 40 分が 3 時間に増えた。

### 4) 大型テーマパークの再生：ハウステンボス

外部の専門家に依頼した。これまでのテーマを捨て、「花の王国」「光のイルミネーション」などに転換した。2011 年から黒字化した。来場者数も 150 万人から 250 万人に増えた。

## 4、再生に向けて

観光地を再生させるためには、その土地の気象・地形などのリゾートとしての特性の把握や歴史・人物・産業・地域特性などを知ることが重要である。その上で観光資源を評価し、対象市場・対象旅行層をしっかりと想定することである。

そして、常に旅行現象（動向）を把握し、課題と解決策を念頭に置きながら、勉強し（メディア・人）プランを練り、Plan-Do-See-Action サイクルを確実に実行することである。

## II 創造都市

### 1、創造都市の重要性

旧態依然とした道具立てや考え方では、これからの都市問題は解決できない。創造的に考え計画し行動することで、都市の革新を現実化し、都市を住みやすく活気に満ちたものにしなければならない。

(参考文献：チャールズ・ランドリー『創造的都市 都市再生のための道具箱』日本評論社、2003 年[原書初版 Earthscan Publications, 2000])